



# 日本語の「も」と韓国語の「도」(do)の対照研究

澤田, 美恵子  
朴, 鐘祐

---

**(Citation)**

神戸大学留学生センター紀要, 8:1-19

**(Issue Date)**

2002-02

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/00522992>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00522992>



## 日本語の「も」と韓国語の「도」(도)の対照研究

澤田 美恵子  
朴 鍾 祐

キーワード：日本語助詞、韓国語助詞、対照研究、も、도 (do)

### 1. はじめに

韓国語と日本語の副助詞がどのように対応しているかについての研究は、まだ進んでいない。韓国語と日本語は、文法体系が極めて似ているといわれているものの、異なる点もある。文脈の中で、微妙なニュアンスを醸し出す副助詞の対応を見ることは、似ているからこそかえって小さな相違によってコミュニケーションの誤解を生みやすい構造に風穴をあけることでもある。また、お互いの言葉の小さなニュアンスの違いを自覚することは、韓国語を母語とする日本語学習者にとっても、日本語を母語とする韓国語学習者にとっても、自分の第2言語での表現を自由にすることに繋がるに違いない。お互いの言葉をできるかぎり、開かれたものにするによって、お互いの文化の理解もまた新たな展開を見ると考えるのである。本研究は、言語教育の現場で応用できるように、できる限り多くの例を考察し、抽象的な議論にならないように心掛けた。

### 2. 日本語の「も」、韓国語の도 (do) の文法的な位置付けについて

日本語の「も」は伝統的な研究では、係助詞、副助詞と位置付けられていたが、最近の日本語学の流れの中では、取り立て詞または、取り立て助詞と位置付けられることが多くなった。係助詞、副助詞のいずれに位置付ける場合も、伝統的な係り結びや係助詞の研究が観念的な議論に関わっていることから、言語教育の現場とは、隔離しやすい説明となっている。こういった歴史的な背景から、従来の係助詞や副助詞といったカテゴリーに「取り立て助詞」という名前を与えた宮田 (1948) は、「わたくし自身の言語活動を内省してみても、外国人が初めて日本語を学ぶ場面を想像してみても、従来の文法体系では、何となく、しっくりしないものがあるように思っていました (p. 8)」と述べている。一方、取り立て詞または取り立て助詞と位置付けてきた研究者の間にも、「も」は扱いにくい助詞である。つまり、取り立ての定義によって、取り扱えない「も」の用法が出てくるからである。たとえば、

益岡・田窪（1992）は、取り立て助詞を「同類の他の項を背景として、ある事項を取り上げる働きをする助詞（p.50）」としているが、「春もたけなわになりました」というような同類の他の項が存在するのかもしれないのが明確でない用法はあつつかっていない。このような用法は、「も」を「とりたて詞」と位置付ける沼田（1986）でも問題となる。沼田（1986：p.143）は、次のように述べ、このような用法を例外的に取り扱っている。

とりたて詞は文中の様々な要素—これを自者と呼ぶことにする—をとりたて、これに対する他の要素—これを他者と呼ぶことにする—との論理的関係を示す語である。とりたて詞はこの定義のとおり、互に対応する自者と他者の、論理的関係を示すのであるから、対応しているのが、一体何と何であるのか、話し手と聞き手に了解されていなければならない。従って、その自者は、もちろん明示されるが、他者も何らかの形で、言語的、非言語的文脈から理解されるのは当然であろう。ただし例外もわずかながらある。それは、次の（14）（15）などに見られる「柔らげ」の「も」と「柔らげ」の「など」と名づけられるものである。

（14）春もたけなわになってきました。

（15）妹など（も）よく、あなたのおうわさをしています。

（14）や（15）のような「も」や「など」は他者のない、特殊なとりたて詞である。

本稿は、現在のところ「も」を何かの文法的なカテゴリーに位置付ける用意はない。また、言語教育にとって、「も」がどういった文法的カテゴリーに属するかという議論に時間をかけることは、それ程有意義ではないように思う。むしろ、日本語の「も」が文の中でどのような振る舞いをし、それがどういった意味で日本語母語話者が使用しているのかを、平易な言葉で明らかにしていくことの方が有意義であるだろう。韓国語の도 (do) に対しても、同じような立場で明らかにしていきたいと考える。

### 3. 日本語の「も」が名詞句に付加した場合と韓国語との対照

3節では、「も」が名詞句に付加した場合の用法を明示し、韓国語では、どのような文が対応するかを考察していく。

### 3-1. 同類

ここで、同類と呼ぶ用法は、「も」が修飾している要素以外にも、他に同類の要素があることが前提とされている場合である。

- (1) 私は、神戸大学の学生です。  
 あなたは？  
 私も、神戸大学の学生です。

同類の「も」に対応するのは韓国語の도 (do) である。この場合は、5節で数量詞との関係を指摘することを除いて、ほぼ「も」と同様に考えることができる。

- (2) 나는 고베 대학 학생 입니다.  
 私は 神戸 大学 学生 です  
 당신은?  
 あなたは？  
 나도 고베 대학 학생 입니다.  
 私も 神戸 大学 学生 です

同類の要素を「～も～も」と重複して使用して明示することができる。

- (3) 太郎も、次郎も、教室に来た。

韓国語의도 (do) も「も」と同様に重複構造をもっている。

- (4) 타로도 지로도 교실에 왔다.  
 太郎も 次郎も 教室へ 来た

### 3-2. 意外

ここで意外と呼ぶのは、命題が成立する可能性が低い要素を明示して、文全体で強調的な意味をだす場合である。

- (5) 猿も木から落ちる。

(6)辛いキムチも食べた。

韓国語の도 (do) も「も」と同様に提示した要素が命題が成立する可能性が低い要素であるという情報があれば、意外の解釈ができるが、日本語の場合と異なった場合もあるので6節で詳しくみる。

(7) 원숭이도 나무에서 떨어진다.

猿 も 木 から 落ちる

(8) 매운 김치도 먹었다.

辛いキムチも 食べた

### 3-3. 詠嘆

ここで、詠嘆と呼ぶ用法は、同類の要素の統括命題として明示して、その統括命題が成立したと、直接経験（あるいは直接経験判断が可能である状況）から、認識するに至る事態が存在することを含意する場合である。この場合は、ほとんど発話時の状況描写である。

(9) 夜もふけてまいりました。

この場合も韓国語の도 (do) は日本語のように詠嘆の用法がある。

(10) 밤도 깊어 잤습니다.

夜も ふけて まいりました。

### 3-4. 驚嘆

ここで、驚嘆と呼ぶ用法は、話題の人物や事物に対して、発話時以前には、話し手が認識していなかった属性を認識するに至る事態を直接経験（または直接経験判断を可能にする状況）から認識し、驚きの感をもって発話する場合である。

(11) 君もたいした奴だ

(12) 君もしつこいな。

韓国語の도 (do) も、同様に使用できる。

(13) 너도 대단한 놈이다.

君も たいした 奴だ

(14) 너도 꽤 끈질기네.

君も しつこいな

英語、フランス語や中国語では、同類の意味(3-1)に対応する形式が詠嘆や驚嘆の意味を担うことができない。しかし、韓国語では、日本語の「も」と同様に、同じ形式で表すことができることがわかった。この点は非常に興味深い点である。4節では、特にこの用法が、どのように他の「も」や도 (do) の意味と関連しているかを見ていきたい。

#### 4. 意味の関連

##### 4-1. 他言語における意味の関連

坂原(1986)は、「さえ」(フランス語で*même*、英語*even*)について語用論的に考察し、(17a)を段階の前提(*scalar presupposition*) (17b)を存在の前提(*existential presupposition*)と考察し、「もの機能はまさに存在の前提を導入すること(p.66)」であると述べている。

(15) 山田さえその試験に合格した。

(16) 山田はその試験に合格した。

(17) a. 山田は、他の人達より、その試験に合格する可能性が低かった。

b. 他の人達も、その試験に合格した。

「も」の場合、たとえば(18)は、通常(17b)の存在の前提を導入するのみで、同類の解釈しかできないが、聞き手に(17a)の段階の前提があれば、意外の解釈ができる。

(18) 山田もその試験に合格した。

山中 (1991 : p35~36) では、「も」の用法が、中国語、英語、フランス語では、どのように表現されるかを考察した。同類の意味を表す中国語の「也」は、意外の意味まで担えるが、英語で同類の意味を表すalso,tooや、フランス語で同類の意味を表すaussiは、意外の解釈を生み出す段階の前提を導入しなかった。しかし、英語やフランス語の場合、(19)のように、命題を成立させた要素として並べ立てた最後の要素には、意外の意味を担う英語のeven、フランス語のmêmeを使うことから、存在の前提と段階の前提には関連があることを考察した。

(19) Georges a bu un peu de vin, un peu de cognac, un peu de rhum, un peu de calva, et même un peu d'armagnac.

George drank a little wine, a little brandy, a little rum, a little calvados, and even a little armagnac. Kay (1990 : p70)

ジョージは、ワインも、ブランデーも、ラムも、カルバドスも、アルマニャクさえ(も)少しづつ飲んだ。

韓国語の도 (do) は、驚嘆や詠嘆の意味まで担えるのであるが、そこにはどのような意味の関連があるのだろうか。

#### 4-2. 韓国語との対照による意味の関連

驚嘆と詠嘆の意味の場合、「も」は、解釈の際、前節で述べた存在の前提の導入が義務的でない。

(20) 君もしつこいな

(21) 夜も更けてまいりました。

つまり「君もしつこいな」といった時、他に「しつこい」と思う人が具体的に存在しなくても「も」を使用できるし、「夜が更けてまいりました」の文でも、その時、他の何かが「更けてくる」というわけではない。しかし、日本語母語話者の場合でもこの解釈は揺れる。田野村 (1991) は、「予想もしていなかった」事態を認識したことを「も」が表現していると考察するが、定延 (1995) は、「君もしつこ

いな」と言った場合は、具体的な人物が想定されていなくても、現実世界でありがちな「通念との類似に支えられて具体的な事態をモで表現できる (p.234)」と分析している。韓国語でもこういった解釈の揺れがあるようであるが、韓国語と対照する中で、このような意味が、「も」の他の意味とどのように関連しているかを探ってみたい。

### ①同類の意味

まず、3-1で考察した同類の意味の場合は、日本語の場合も韓国語の場合も、明示されている要素と同類であると考えられる要素が想定される場合、想定される要素は、「も」の直前の名詞句レベルと「も」の直前の名詞句を含む動詞句レベルと、文全体のレベルまで含む場合がある。韓国語の場合も同様のことが観察される。

(22) 花子も走った。(名詞句レベル：花子以外の人が走った)

(23) 하나코도 뛰었다.

花子も走った

(24) 太郎は、顔も洗った。(動詞句レベル：太郎は 顔を洗う以外の行為もした)

(25) 타로는 얼굴도 씻었다.

太郎は 顔 も 洗った。

(26) 風も吹いた。(文レベル：風が吹く以外の事態が起こった)

(27) 바람도 불었다.

風 も 吹いた。

### ②意外の意味

意外の意味の場合は、「も」が付加した名詞句が指示する要素は、命題を成立させるのに可能性の低い要素である。日本語の場合も韓国語の場合も太郎が辛いものがきらいだという前提があれば、意外の解釈となる。



(28) 太郎はキムチも食べた。

(29) 타로는 김치도 먹었다.

太郎は キムチも 食べた

### ③詠嘆の意味

「も」の直前の名詞句は前提となる要素であり、その文の新情報となる部分は、述語である。この場合も韓国語と同様である。

(30) 秋も 深まってまいりました。  
前提 新情報

(31) 가을도 깊어졌습니다.  
秋 も 深まってまいりました  
前提 新情報

(30) の場合、「も」の解釈は2通りあると考えられる。1つ目の解釈は、同類の意味と強く繋がっている。通常、現象文は、文全体が新情報である。たとえば、秋の美しい景色を描写するときに、次のように述べるとしよう。

(32) 空が青く高い。湖がきらきら輝いている。木の葉が赤く色づいてきた。

しかし、おそらく「が」を使用して、ただ文を羅列し続けることは不自然であり、秋を描くという目的があれば、2つ目、3つ目の文に「も」を使用する方がより自然に描写できる。

(33) 空が青い。湖もきらきら輝いている。木の葉も赤く色づいてきた。

この場合は、秋を統括命題とした文レベルの同類の要素を明示化していると考えられる。そして(33)の発話の後で、(30)を発話することで、秋の表現をしめくることができる。

つまり「秋も深まってまいりました」という文は「空も青い」「湖も美しい」「木

の葉も色づいた」という概念を統括する役割にある。発話時以前から、「秋」は話し手の心の中にあり、「秋」は前提となっている。その後、秋の深まりを感じるいくつかの事態を直接経験して「秋が深まってきた」という判断を下し、秋の述語として「深まってきた」と表現するのである。これが一つめの解釈である。二つ目の解釈は、「秋も深まってまいりました」という発話が何の前触れもなく使用された場合である。この場合は、反対に、秋が深まってきたと感じる事態（たとえば、「空が青い」「木の葉が色づいている」）が存在することを含意することになる。

韓国語の(31)の場合も同様に二つの解釈ができ、それゆえに単独の「秋も深まってまいりました」という表現には、秋という季節から想定される様々な風景をも、聞き手に伝えることができ、発話時と発話場面に依存して詠嘆の意味を醸し出すことができる。

#### ④驚嘆の意味

驚嘆の意味は意外の意味と繋がっている。たとえば、(34)は、ケンが日本で育った日本人だという情報があれば、「刺身」以外の食べ物も同様に食べたという解釈がとれるが、ケンがはじめて外国から日本に来た小学生で日本食をはじめて食べたという情報があれば、この「も」から意外の意味が読み取れる。

(34) ケンは刺身も食べた。

つまり、話し手の認識する命題成立の可能性の一番小さい要素が成立したことから、意外の意味が生まれる。

(35)の場合も、発話以前には、君について「しつこい」という属性を認識していなかったが、ある事態を認識することによって発話の時点で、君は「しつこい」という属性をもつに至ったことを話し手が認識したことが表現されているのである。

(35) 君もしつこいな。

(36) 너도 꽤 끈질기 네.

君も しつこいな

この解釈は、韓国語との比較の中で判明してきたことで、日本語の場合も韓国語の場合も、発話時と発話場面に依存しており新しく発見した属性の付与である解釈が強い。この意味の場合は、先に述べた詠嘆とはことなり、意外の意味と繋がっていることから、同じ感嘆系の文であっても、驚きの意味と繋がっている。ゆえに、本稿ではこの意味を驚嘆と呼びたい。<sup>註1</sup>

詠嘆の場合も驚嘆の場合も、話し手が直接経験（あるいは直接経験判断を可能にする状況）から、発話時と発話場面に依存して、述語を決定していることは、非常に大切な点である。どちらの場合も、述語に焦点があてられることから、でてきた意味であると思われる<sup>註2</sup>。詠嘆の場合は、現前の現象を描写することから発話時と発話場面に依存することになる。驚嘆の場合は、意外の意味では名詞句に焦点があてられ、意外な名詞句が事態を成立させたことから事態に対する意外性が表現されるが、驚嘆の意味では発話時と発話時以前の対象に対する属性の認識の変化が表現されているのである。

## 5. 数量詞に「も」が付加した場合と韓国語との対照

この節では、数量詞に「も」が付加した場合の意味が韓国語ではどのような形式であらわされているかを見ていきたい。名詞句+「も」の場合は、韓国語と日本語はほとんど同様であることが考察されたが、数量詞+「も」の場合は、かなり異なった振る舞いをするようである。<sup>註3</sup>

### 5-1. 命題が成立する可能性が低い数量の成立

(37) は、命題が成立する可能性が低い数量が成立したことから、予想より大きい数量が成立したことを強調している。この場合、韓国語では、(38) のように、**도** (do) ではなく、**이나** (ina) となる。

(37) 10人も来た。

(38) 10 사람 이나 왔다  
10 人 も 来た

### 5-2. 命題が成立する可能性が高かった量の不成立

(38) は、命題が成立する可能性が高かった量が成立しなかったことから、予想

より小さい数量しか成立しなかったことを述べている。つまり、10人は来ると予想していたのに、10人未満の数量しか成立しなかった場合である。韓国語では(40)のように、「도」(do)が使用される。

(39) 10人も来なかった。(解釈：来た人数は、10人未満だった)

(40) 10 사람도 안 왔다.  
10 人 も 否定辞 来た

### 5-3. 命題が成立する可能性が低かった数量(非存在)の成立

命題が成立する可能性が低かった量(非存在)の成立とは、(41)の例のように、来なかった人数が予想より多かったことを述べる文である。10人が来ないとは予想しがたかったが、実際には「来なかった人数が10人に達した」という意味である。この場合は、否定時のスコープは「も」まで及ばないため、10人という数量は否定されない。10人という数量が非存在の数量として成立して、その数は予想よりも多かったことを表現している。韓国語では(42)のように「이나」(ina)となる。

(41) 10人も来なかった。(解釈：来ない人の人数は10人に達した)

(42) 10 사람이나 오지 않았다.  
10人 も 来る 否定辞 た

### 5-4. 最小単位の不成立

(43)のように、通常命題が成立する可能性が高く、最も小さい量の単位が成立しなかったことを述べた場合は、成立する量がゼロであることを述べることとなる。この場合も、(44)のように、韓国語では도(do)となる。

(43) 一人もない。

(44) 한 사람도 없다  
一人 も 非存在否定辞

### 5-5. 十分量 (条件文の前件)

(45) のように条件文の前件に、数量詞+「も」で提示して、命題が成立する十分量であることを表現できる。この場合、韓国語では (48) のように、이나 (ina) となる。

(45) 5人も来れば、いいでしょう。

(46) 5사람 이나 오면 됐죠  
5人 も 来る 条件辞 いい 推量

### 5-6. 十分量 (否定の未定)

命題が成立することが未定な文の中に、数量詞+「も」で提示し否定して、それ以上は必要ないことを示す。この場合は、韓国語では도 (do) となる。

(47) 10分もかからないでしょう。

(48) 10분도 안 걸리죠  
10分も 否定辞 かかる 推量

日本語の数量詞+「も」を韓国語と比較すると韓国語の場合は、通常否定文の時に도 (do) が現れ、肯定文の時に이나 (ina) が現れている。日本語では「10人も来なかった」の文は2通りの解釈がある。一つは、「来た」人の数は「10人」未満であったと「10人も」の部分が否定されている。この場合、韓国語では도 (do) が現れる。もう一つの解釈は、「来なかった人数が10人にも達した」である。この場合は、「10人も」に否定は係っていないために、韓国語は、이나 (ina) が現れている。日本語の場合は、「も」のスコープが否定のスコープより広いので全ての場合「も」で表示できるが、韓国語の도 (do) や이나 (ina) のスコープは否定のスコープより狭いために、肯定の場合には이나 (ina) が、否定の場合には도 (do) が使用されていると言えるだろう。また、意味的にも、可能性が低い量が成立した場合には이나 (ina) が使われ、可能性が高い量が成立しなかった場合には、도 (do) が、現れている。

この現象は、「さえ」に相当する韓国語의마저 (majjo) と조차 (chocha) が名詞

句に付加される場合にも観察される。次節でその点を考察する。

## 6. 日本語の「さえ」と韓国語の対照

(49) 太郎も来ました。

(50) 타로도 왔습니다.

太郎も 来ました。

(51) 太郎さえ来ました。

(52) 타로마저 왔습니다

太郎さえ 来ました

(53) 타로마저 돌아가 버렸다.

太郎さえ 帰って しまった

(50) の「도」(do) の場合は、「太郎」が命題を成立させるのに可能性が低い要素であるという情報があれば、意外の意味の解釈ができるのに対して、(52) の 마저 (majo) はそういう情報がなくても「太郎」が命題を成立させる可能性が最も低い要素であることを示し、意外の解釈ができる。日本語の「も」と「さえ」も同様の仕組みをもつが、韓国語と日本語が異なることもある。まず、마저 (majo) は、肯定文では日本語の「さえ」ほど文脈の力を借りずに意外の意味をだすことは難しいようで、(53) のように「てしまう」などをつけて残念な気持ちを前面に出す方が自然に使用できるようである。日本語の「も」の場合は否定文の場合でも変化はないが、韓国語の場合は、否定文では、(54) のように同類の意味だけで意外の意味をもたない場合は 도 (do) が使えるが、意外の意味を持たせようとする (55) のように、조차 (chocha) を用いなければならない。

(54) 하나코도 안 오고, 지로도 안 오고 타로도 안 온다.

花子も 否定辞 来る、次郎も 否定辞 来る、太郎も 否定辞 来る

- (55) 타로 마저 안 온다  
 太郎 さえ 否定辞 来る

つまり、韓国語では、日本語の「さえ」にあたるものが2つの助詞に分かれており、可能性の高いものが成立しなかった場合は、(57)のように、조차 (chocha) が使われ、可能性の低いものが成立した場合は、(59)のように마저 (majo) が使用されるのである。

- (56) 賢い太郎さえ、A大学に受からなかった。  
 (可能性が高い要素が成立しなかった場合)

- (57) 똑똑한 타로조차 A 대학에 들어가지 못했다.  
 賢い 太郎さえ A大学へ 入ることが できなかった

- (58) バカな太郎さえ、B大学に受かった。  
 (可能性の低い要素が成立した場合)

- (59) 멍청한 타로마저 B 대학에 들어갔다.  
 バカな 太郎さえ B大学へ 入った。

このことは前節でみた数量詞との関係と平行するものであり、韓国語では、可能性が低い要素が成立した場合と可能性が高い要素が成立しなかった場合を異なった助詞で表すが、日本語の場合はそういった助詞が全文にスコープをもち、文全体で可能性の低いことが起こったことと捉えて「も」や「さえ」を使用していることがわかる。

また日本語には条件文の前件に「さえ」を置いて、主文が成立するための十分条件を成立させる要素を提示することができるが、韓国語の場合は、(61)のように、日本語の「だけ」に相当する助詞만 (man) が現れる。

- (60) 太郎さえいれば、幸せだ。

(61) 타로만 있 으면 행복하다.  
太郎だけ いる 条件辞 幸せだ

(62) キムチさえあれば、ご飯が何倍でも食べられる。

(63) 김치만 있 으면 밥을 몇그릇 이나 먹을 수 있다.  
キムチだけ ある 条件辞、ご飯が 何倍 でも 食べられる

山中 (1991a : p.36) では、条件文の前件に「さえ」が置かれ、「それだけあれば十分だ」という含意が込められる場合は、中国語、英語、仏語、それぞれ、下線部の日本語の「だけ」に相当する不変化詞で表されることになり、日本語同様、後件の省略が可能であることを指摘した。韓国語の場合も中国語、英語、仏語と同様であることがわかる。

太郎さえ来れば、…。

只要太郎来、…。 (中国語)

If only Taro would come. (英語)

Si seulement Taro venait. (仏語)

坂原 (1986) は、「前件に現れる“さえ”が、条件文全体にわたるスコープを持つことができるのに対し、even, mêmeなどはそれができないという事実を、直接的にこれらの語の差とするか、それとも、日本語と、英語やフランス語の条件文の構造上の差とするかは、興味深い問題である。ただ、if節が移動変形に対する「島」であることを考えると、これは、多分、条件文の構造の差ととらえるべきだろう。」と述べている。本稿では、韓国語の場合も英語や仏語同様に、마저 (majo) 조차 (chocha) が、条件文全体にわたるスコープをもつことができないという事実のみを指摘するにとどめ、その理由については、稿を改めて考えてみたい。

## 7. おわりに

日本語の「も」と韓国語도 (do) が名詞句に付加している場合、非常に類似した振る舞いをするのがわかった。また、先行研究でも、解釈が揺れていた詠嘆や驚嘆の意味が韓国語の도 (do) でも、表せることが明確になり、その意味が마저



(majo) や **초차** (chocha) とどのように繋がっているかも示した。しかし数量詞との関係を見ると、日本語と韓国語が異なることがわかってきた。

日本語の場合は、否定文の場合も肯定文の場合も数量詞+「も」で表現することができるが、韓国語の場合は、否定文の場合は **도** (do) で、肯定文の場合は **이나** (ina) となる。また、意外の意味も日本語の数量詞+「も」は文全体で成立する可能性が低い数量が成立したことを示せるが、韓国語の場合は成立する可能性の低い数量が成立した場合は **이나** (ina) が使われ、成立する可能性の高い数量が成立しなかった場合に **도** (do) が使用される。このことは、名詞句「さえ」の場合と平行する。日本語の「さえ」は文全体にスコープを持つために、条件文の前件の場合も否定文の場合も使用できる。**마저** (majo) と **초차** (chocha) は、条件文の前件や否定文よりもスコープが狭いため、**마저** (majo) は命題を成立させる可能性の低い要素が命題を成立させた場合に使用され、**초차** (chocha) は、命題を成立させる可能性の高い要素が命題を成立させなかった場合に主に使用させる。また条件文の前件で、命題を成立させる十分条件の要素を提示する場合は、**만** (man) が使用される。

日本語と韓国語の文法は、確かに他の言語と比較すると似ている点が多くあることが理解されるが、細かな点では異なる点も多くあった。対照することによって、日本語だけを見つめてはわからなかった点も明確にすることができた。文化の問題もおそらく似た点があるのではないのだろうか。お互いは鏡のようになり、より己と他者を知っていく機会とすることができる。

注1. 益岡 (1991) の文の表現類型では、感嘆型には、詠嘆系と驚嘆系の区別ができることが指摘されている。

2. 詳細は、澤田 (2001) を参照して頂きたい。

3. 「も」と数量詞との関係の詳細は、山中 (1991b) を参照して頂きたい。

#### <参考文献>

- 1) 坂原茂 (1986) 「“さえ” の語用論的考察」 「談話行動のモデル化に関する認知科学研究」
- 2) 定延利之 (1995) 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」 『日本語の主題と取り立て』 くろしお出版
- 3) 澤田美恵子 (2001) 「「も」の解釈—「夏も終わりですね」—」 『日本言語学会第123回大会予稿集』 日本言語学会

- 4) 田窪行則・金水敏 (2000)「複数の心的領域による談話管理」坂原茂編『認知言語学の発展』ひつじ書房
- 5) 田野村忠温 (1991)「「も」の一用法についての覚書－「君もしつこいな」という言い方の位置づけ－」『日本語学』10-9 明治書院
- 6) 寺村秀夫 (1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 7) 沼田善子 (1986)「とりたて詞」奥津敬一郎 (他)『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社
- 8) 益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 9) 益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版
- 10) 宮田幸一 (1948)『日本語文法の輪郭』三省堂
- 11) 森重敏 (1971)『日本文法の諸問題』笠間書店
- 12) 山中美恵子 (1991 a)「「も」「でも」「さえ」の含意について」  
『日本語と中国語の対照研究』14号、日本語と中国語の対照研究会編  
(1991 b)「「も」の含意について その2－「数量詞+も」を中心に－」  
KANSAI LINGUISTIC SOCIETY 11 関西言語学会
- 13) Kay.P. (1990) “Even”, *Linguistics and Philosophy* 13.

## A Contrastive Study of Japanese Particle “Mo” and Korean Particle “Do”

SAWADA Mieko

PARK jong woo

This paper presents a view of Japanese particle “Mo” and Korean particle “Do”, which has never been discussed in Japanese linguistics. The Japanese particle “Mo” and Korean particle “Do”, with a noun phrase, have very similar function. They have 4 usages respectively, which are called in this paper, Same, Surprising, Exclamation of Admiration, and Realization. Example sentences are shown below.

### 1. Same

Japanese : Taro mo kita.

Korean : Taro—do wassta.

Meaning : Taro also came.

### 2. Surprising

Japanese : Saru mo ki kara ochiru.

Korean : Wongsungi—do namvesse ttelecyainta

Meaning : Even monkeys fall from trees.

### 3. Exclamation of Admiration

Japanese : Tsuki mo kireidane.

Korean : Tal—do—mmessita.

Meaning : The moon is so beautiful!

### 4. Realization

Japanese : Kimi mo shitsukoi na.

Korean : Ne—do kkoe kkuncyilgita

Meaning : You are so persistent, aren't you!

The Japanese particle “Mo” usages of Exclamation of Admiration and Realization have not been clearly explained in the previous analyses. However we can point out its usages by contrasting Japanese and Korean.

Unlike the noun phrase usage, Japanese particle “Mo” with a quantifier phrase is very different from Korean. In the case of an affirmative sentence, Korean can use particle “Ina” , but in case of a negative sentence, Korean uses the particle “Do” . This linguistic phenomenon means that the Japanese particle “Mo” has wider scope than the Korean particle “Do” and “Ina” .